

広報まつばら

相棒

あなたの

人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。

第34回目は、天美西3丁目で佃煮などの販売を手がける株式会社廣川、専務の廣川昌平さんです。

※今回広報まつばらに載らなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。



夢を語れる会社に：

会社に近づくとも昆布の香りが漂ってきて、私の食欲を刺激した。昔ながらの雰囲気を感じ出す店内にはたくさんの賞状が飾られている。明治35年より昆布とともに長い歴史を刻んできた「廣川昆布」の4代目となる昌平さん（現専務）は、実は次男。中学生の時に突然兄に呼ばれ、（父の知らない所で）「俺は会社を継ぐつもりはないから、お前が継いでくれ」と言われたそうだ。最初は昌平さんも、大学に進んでエンジニアの仕事をしていっていたらしいが、一大

決心をして、27歳の時に会社へ戻ってきた。

「やるからには、夢を語れる社員がいて、皆が誇りに思える会社になりたい。会社を、歴史を終わらせたくない」この一心でテコ入れを始めたという。「昆布には佃煮などの定番があるからこそ、その定番を崩すと楽しい」と昌平さんは笑顔で語る。しかし、崩しすぎると世間に嫌がられる恐れもある。その調整が難しい。「こうしよう、ああしよう、仲間と語るのとはとてもやりがいを感じる」と話してくださいました。

『もがく、あがく』去年よりはマシ、ならば何年も先はもつとマシ。そんな希望をもつて一歩ずつ。売れなくてもいい、俺らの『うまい』を追求したい。そうやって壁にぶち当たりながらも2年以上の歳月をかけ、みんなで作ったのが佃煮菜シリーズ。一番愛着がある

商品。今でも仲間たちと当時のことについて話すという。「俺たちなりに『うまい』商品。これは自己満足に過ぎないかもしれない。だからこそ売れた時にはみんなが嬉しい」そう語った昌平さんの顔はどこか輝いてみえた。

私もシリーズのひとつである「ちりめん鰹昆布」をいただいた。佃煮にちりめんや鰹節が入っているこの商品は鰹節がアクセントとなり、普通の佃煮とは違う新しい美味しさを味わうことができた。

昌平さんにとつての相棒は何か何うと、「営業と製造の3人」と答えてくださった。「ちよつと抜けてるいじられっ子、スゴク真面目な人、変わった面白い人。みんなが昔からいた訳ではないが、波長があつて一緒にいて楽しい」という。「お酒の席で私にめっちゃ飲ませてくるやつとかいてんねん」と笑顔で話す昌平さんを見て、本当に仲が良く、腹を割って話せる仲なのだなと感じた。さまざまな商品がある「廣川昆布」。

絶賛発売中！ユーモア溢れる皆さんが精魂込めて作った商品をご賞味あれ。

文 岡本美咲（二年）